



極 樂 通 信
U B U D



photo:Y. Hori

バリでよく見かけるもののひとつにおかしな石像がある。寺院や建物の庭先や道端などに鎮座しているこれらの石像は、それほどたいした歴史を刻んでいないにもかかわらず、苔むして黒ずみ、部分的にちょっと朽ちていたりして、さながら数百年もそこにあったような風体をしている。

中にはかなりひょうきんな顔をしているものもあるが、この風体によってずいぶん威厳のあるものに見えてしまう。さらに日本のお地蔵さんのお供え物のようにチャナンが置かれ、耳にはジュブンが飾られていたりもするから余計にそう感じてしまう。

事ある毎に呼び出される神々がたまにロスメン代わりに宿ったりすることもあるのであろうか。表情豊かな石像を見ていると結構真剣にそう感じるので、これらに囲まれて生活するにはなかなか真面目な態度で生きないといけないな、とも思うのである。

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama	
Upacara Perkawinan-----	4
Pesta Kesenian Bali-----	6
サーカス・ブリッジ-----	8
● mau mau!	
バリニーズ女性と結婚したい症候群-----	9
● Kabar Baru Berita Lama	
[ARMA] 全館 OPEN!-----	10
● C・O・L・U・M・N	
「バリ島楽園紀行」こぼれ話-----	12
● UBUD よろず百科	
KERANJANG / カゴ-----	14
● BUKU-BUKU 紹介	
オラン・バリ-----	17
● Lancong Lancong Bali/2	
ランチョン ランチョン バリ / 2-----	18
● Belajar Tari & Gamelan -12-	
私と踊り-----	21
● Dari Jepang	
椰子の葉影に十字星-----	22
● Pondok Manis 私の常宿	
bucu view bungalows-----	23
● Pesan & Kesan	
旅人一声-----	23
● Berita Terbaru	
その他のニュース-----	24
● Orang-orang Ubud	
うぶんな人々-----	25
● Space	
おしらせ-----	26
● Pengumuman	
でんごんぼん-----	26

○表紙のこぼれ○

風

を感じられる心でいたい。

バリに来るとそう思います。

追い求めず、自然に感じる。

そんなとき、笑顔がかえってきたら、

バリがもっと近くに感じました。

小原孝博

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

☐ Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

☐ Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)

☐ E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 Upacara Perkawinan・結婚式

うぶんな人々 (Vol.13) で“交際二年で結婚”の見出しで秘密を暴露された由美さん。その実態と4月29日の結婚式の模様を報告いたします。「UBUDの母」と呼ばれ親しまれている由美さん（本人はこの名称を気にしていない）、まだ面識のない人のために、ここで簡単に紹介します。



佐藤由美（さとう・ゆみ）

1962年愛知県半田市生まれ。85年、ロックバンドのギタリスト&ボーカリストとして

名古屋で活躍していた時に、バリのガムランに出会う。数回の短期旅行の後、90年よりウブド在住。居酒屋「影武者」の料理アドバイザーとして働く傍ら、バリの文化と芸能を紹介するため、執筆活動を始める。現在、自らバリの舞踊にチャレンジ中。

【バリ島・楽園紀行（新潮社・とんぼの本）の著者紹介をまるまる参照しました】

由美さんの結婚相手はバトゥプランのマデ・マハルディカ君。通称デド。弱冠24才の若さで、バトゥプランのパロン・ダンスの花形スターである。ニュピの日以外、364日、毎朝地元のパンジャール・デンジャランでパロンを踊っています。全バリのパロンのコンテストで二回優勝したことがあり、あちこちのチャロナランに呼ばれて踊りに行くほか、ガムランの演奏、特にクندگانが得意です。彼のパロンは切れがよく、かつ繊細な動きで見ている者を魅了します。まるで、生きているパロンがそこにいるよ



うです。機会があれば一度見ることをお勧めします。



結婚式の日取りはバリ・ヒンドゥー・ダルモのカレンダーからよい日が選ばれました。

4月29日：新郎の家では、数週間前から村人によって、今日の結婚式のための供物や飾り付けが準備されている。バリでは一般的に結婚式は新郎の家で執り行なわれる。敷地の中央にある慣習の行事を行なうバレ・ダギンとよばれる東屋を中心に儀式は執り行なわれる。敷地内の建物はそれぞれに役目が決められ、それにしたがって使われている。

花婿・花嫁はムテンとよばれる寝所に居を構え、儀式に備える。ムテン前には、バナナの葉で作った門、塀が綺麗に飾られ、本日の主役がここから出入りすることがわかる。

■結婚式はプマंकが到着した早朝の6時から始まった。すでに、村人20人ほどがバレ・ダギンの裏手でラワール作りに励んでいる。プマंकはバレ・ダギンとムテンの間に座り、ムラジャン（家寺）の方角に向かってお祈りを始める。イブ・イブ達がプマंकの手伝いをする。花婿、花嫁がTシャツにサルン、スレンダンの略装で登場。家族の見守る中、いよいよ、ヒンドゥー・ダルモの儀礼が始まった。バナナの葉を花嫁が押さえ、それを花婿がナイフで裂く儀式、これから二人で力を合わせてやっていきましょうという、花婿が作るラワールを花嫁が売り歩くという模倣商いの儀式など、家族達の暖かい笑顔の中で進められていく。

■午前8時：プマंकが帰り、花婿、花嫁は10人ほどの家族に付き添われて近くの川へマンディーの儀礼に歩いてでかける。早朝の川マンディ、冷たそうである。ここで真新しい衣裳に着替えて帰る。50mの川上では、あとでバビ・グリーン（豚の丸焼き）になる豚が洗われ串刺しにされている。バリらしい風景と言え言える。新郎新婦はしばしの休憩のあと、結婚式の衣裳に着替える。お疲れサマ。

■午後2時：女性のプダンダが到着。プダンダはバレ・ダギンの一段と高くなったところで、衣裳を着替え、儀礼の準備を整える。花婿、花嫁がバリの結婚衣裳で登場し、飾られたバレ・ダギンにあがる。アंकフルンの演奏とワヤン・ルマが演じられる中で、プダンダの厳粛な儀礼が始まった。儀礼がとどこおりなく終わったことをプダンダから告げられ、二人は目出度く結婚することができました。プダンダから優しい言葉が掛けられたようで、二人の顔に笑顔がほころぶ、おめでとうございます。新郎新婦となってすでに訪れている来客に、さっそくお礼の挨拶。

■午後4時：参列者がぞくぞく

と来訪。新郎新婦が満面の笑みで一人一人と会話をかわす。披露宴が始まり、バトゥブランの村長、親類代表が来客に挨拶。たくさんの参列者が一同に会食、会談。食事が済み三々五々帰る参列者を見送る新郎新婦。

■午後10時：すべてのお客さんが帰り、やっとバリの結婚式の長い一日が終わりました。新郎新婦は昨日もあり寝ていない様子。お疲れさんでした。これからの末永いお幸せを皆で応援しています。

これからの由美さんのバトゥブラン生活と子育て日記は「極楽通信・UBUD」で連載する予定です。ご期待ください。え〜子育てだって?!もう子供ができたの?!計算合わないな。そうか由美さんもバリの習慣にのっとって結婚したのか、ということは、お腹が大きい花嫁さんだったということですか。という読者からの声が聞こえてきそうですが、そんな話しもきっと書いてくれると思いますので楽しみにしててください。



Pesta Kesenian Bali Festival Gong Kebyar

1996年6月8日に始まった、第18回 Pesta Kesenian Bali (バリ・アート・フェスティバル) が、去る7月6日に閉会となりました。白昼のトランスも登場したオープニングパレードも見物でしたが、今年のペスタ・クスニアン・バリ (通称: ペスタ・スニ) は、例年に劣らず充実したイベントで連日盛り上がっていました。特にユニークだったのは、6月25日に行われた、グループ「Suar Dwi Stri」による公演。これはバリ在住の日本人及び日系人のイブ・イブたちによる、なんと、グランタン・ベログという竹のガムラン・グループです。もともと「Suar Dwi Stri」は、数年前から JEGOG でおなじみのババ・スウェントラ氏をはじめ、Suar Agung のベテラン Penabuh (演奏者) の指導の元に地道な練習を重ねてきました。メンバーは、イブ・カズコ女史をはじめ、バリ生活ウン十年のイブや仕事でバリバリにバリで活躍していらっしゃるご婦人方等、そうそうたる顔ぶれです。一昨年程前から、毎年恒例となった日本人会による盆踊り大会でも、その腕前を披露してくれていましたが、今年は一気にペスタ・スニに参加! というわけです。極通スタッフも、そのステージを拝見いたしましたが、それは以前にもまして力強く、キレもよく、とても素晴らしい演奏でした。そしてなんとジョゲツ・ブンブンまで披露してくれ、S.T.S.I. (国立芸術大学) 舞踏学科に留学中の日本人女性の方達が踊り手として参加し、いっそう花を添え、会場を埋め尽くしたバリ人観衆もヤンヤ・ヤンヤの大喝采でした。

続いて、はるばるジャカルタから参加の日本人女性グループによる演奏。ジャカルタ日本人会のご婦人達が、バリのガムランを演奏してくれるなんて感激! 演目が多すぎて少々中だるみしてしまいましたが、バリの正装でパッチリ決めたイブ・イブたちも頑張ってくれました。

さて、例年イベントの中でも一番人気のあるフェス

ティバル・ゴン・クビヤール (各県代表の選抜メンバーによるガムラン・ゴン・クビヤールの競演)。今回はこれについてちょっと詳しく書いてみましょう。

毎年、共通のテーマが与えられ、それに基づいて…

- 1) Tabuh Kreasi Baru (クリアシ・バル) = 新作のガムラン演奏曲
- 2) Sandya Gita (サンディオ・ギト) = バリ音階のコーラスが入った演奏曲
- 3) Tabuh Lelambatan (ルランバタン) = 通常のプラのオダランで演奏されます。トロンボンの演奏も入った古典スタイル。
- 4) Tarian (タリアン) = 踊り。今年のテーマは創作レゴンでした。
- 5) Sebdratari (センドラタリ) = 語りの入った舞踏劇

以上の5演目が各県ごとに創作され、競われるわけです。…が実は、本番の競演までのプロセスがとてもタイヘン。

まず、各県ごとの実行委員会によって、誰に作曲を依頼するか、メンバーの選出はどうするか、練習場所はどこにするか、ということから決められます。作曲、及び演奏指導にあたるのは、ガムラン界でも名の



知れたベテランや新進気鋭の S.T.S.I. の卒業生達。各県のレベルの平均化をはかるため、選抜メンバーには、S.M.K.I. (国立芸術高校) 及び、S.T.S.I. の在学学生、卒業生は除外されます。

毎年2月には、曲も出来上がり、選抜メンバーの猛練習が始まります。各県毎によって、きっと予算の額も違うのですが、例えばここギアニャール県の場合には、選抜メンバー (演奏者、踊り手) は無報酬で参加します。毎晩のように2〜3時間の練習がありますが、ナシ・ブunksの晩ごはんがサービスで出るのは週に1〜2回、ほとんど手弁当のハードレッスンです。

さて、5〜6月になると、そろそろ曲も完成してきて、他県の出来具合が気になります。Penabuh (演奏者) や Penari (踊り手) 達にも気合いが入ります。なんと、実行委員会によって医者が呼ばれ、選抜メンバー全員の健康診断まで行われるのです。血圧を計る程度ですが、疲れ気味だったり、血圧が低かったりすると、医者からビタミン剤や栄養剤が支給されるのにはビックリ。そして、メンバー全員が本番まで「遠出は控える事、特にバイク事故や運転には充分注意すること (!?)」などの注意を受けます。そうです、大事な本番前に何か事故があっても、簡単に代役は見つかりません。今まで数ヶ月かかって練習してきた何曲もの新曲は、いくらガムランの天才バリ人であっても、数日ではマスター出来ないくらいに高度なレベルに完成しているのです。

県毎に、どこかのバンジャールを借りて、予行演習も行われます。

そして本番。昨年までのスケジュールなど考慮された上で、どこどこを県を対抗させるかが決められます。ペスタ・スニ期間中、一週間に一度の割合で、フェスティバル・ゴンが開催され、たとえば、今週の○曜日は、バングリ県対クルンクン県、来週の○曜日はギアニャール県対ブレレン県、というように、ひとつのステージで対抗形式がとられます。

そのガムラン合戦となる会場は、アートセンターの大きな屋外ステージにもかかわらず、超満員の観衆で熱気ムンムン。ひとたび演奏が始まるともう、うねるような大歓声やヤジと拍手で、それはそれは超エキサイティングな雰囲気。「うるさすぎて、スリン (竹笛) の聞かせどころも台無しだ。」と怒る同業者 (つまり Penebuh) もいます。

そしてちなみに、今年の優勝チームはギアニャール県代表でした。

このイベントも今年で18回目を数えるほどの人気がありますが、創作曲が年々マンネリ化の傾向にあるらしく、そのマンネリ化をなんとかしようとするあまり、クリアシ・バルではあまりにも突飛で奇抜なメロディーを入れ過ぎて、かえって不評をかってしまうことも最近では多いそうです。

このフェスティバル・ゴン・クビャールで生まれた新曲の中でも、特に素晴らしく、今でも名曲として全バリで人気があるのが、'91の時のブレレン県によるクリアシ・バル「Jagra Parwata」と同じく'91のギアニャール県によるムリアシ・バル「Gora Mardawa」の二曲。どちらの曲も現 S.T.S.I. 教授であり、ガムラン界の大御所である Nyoman Winda 氏の作曲です。この二つの曲のスピード感、盛り上がりの興奮度、耳について離れないメインテーマのメロディーは、まさにクリアシ・バルの名曲中の名曲。

UBUD の Semara Ratih をはじめ、デンパサールやあちこちのガムラン・グループがレギュラーの Tabuh (曲) にしているのも、そのうち耳にすることもあるでしょう。カセットショップにはあると思うので、ぜひ探して聴いてみてください。

なにはともあれ、毎年開催されるペスタ・スニ。そして、フェスティバル・ゴン・クビャールは、ガムラン好き、踊り好きの人にとっては涙モノのイベントです。UBUD に泊まってデンパサールまで行くにはちょっとしんどいし、夜のイベントは、たいてい 11:00 や 12:00 頃まで続いたりするもので、足を確保するのが大変。何人かの友人、バリ人と同行するのが一番いいかもしれません。人気のある県のフェスティバル・ゴン・クビャールの日には、チケットのダフ屋まで現れる始末。会場には数えきれない程の屋台が出るし、夜のイベントを観に行く時は、夕方早目に着くようにしましょう。いろんな展示品やお土産屋さんもあって楽しいので、ぜひゆっくりのぞいてみてください。

ペスタ・スニのプログラムは、英語版も出ていて、デンパサールの政府観光案内所などでもらえます。

さて、来年はどんなイベントがあるのでしょうか。もう今から楽しみです。皆さんも一度、Pesta Kesenian Bali に合わせてバリに来てみてはいかがでしょうか？

サーカス・ブリッジ

UBUD のジャラン（道）が年々良くなっていく。というより、今バリ島はこんな所までもと思うほど、道路はアスファルトで整備されている。そして同時に、めざましいスピードでスベダモートル（オートバイ）やモビル（車）の台数が増えていく。インドネシア国産のセダン車も発売されたと聞く。これは、まさにインドネシアのモーター・ゼーション時代への幕開けではないか。

数年前までの UBUD は、ゆっくりとジャラン・ジャラン（散歩）できた静かな村だった。それが、UBUD 滞在の楽しみの一つでもあった。今では、モビルやスベダモートルの交通量が多く危なくおちおち歩けないありさまである。

その昔。と言っても私が知っているのはほんの 6 年前の話だが、その時 UBUD で手に入れた本に「バリ島・海のない村へ」というのがある。UBUD のビナ・ウィサタ・ツーリスト・インフォメーションを創設したミスター・シルビオ・サントーサの出版している地図「Bali Path Finder」に載っていた（今発売している地図には載っていない）文章の日本語版である。その中に UBUD 近郊のジャラン・ジャランのルートがいくつか紹介されている。久しぶりに読み返してみても、あまりの様変わりにはびっくりしてしまった。その一つ、シンガクルタ・ルートを参考にして、現在との違いを比較してみることにしよう。



UBUD からチャンプアンの橋を渡り、左手にある急な坂道を登る。スベダモートルで登るには一度止まったら大変なことになってしまうほどの急坂で、車が一台通れるぐらいの狭い道。ここは、今は路肩が整備されたくらいで、昔と変わらないようである。道なりに行くとベネスタナン村に出る。土の道と崩れた土壁の家並みが一体化している。田舎特有のドブや路肩がな



い風景だ。昔は突当たったところに寺院（プラ・ダラム）があり、寺院の脇の寂しげな狭い道を抜けて、水田に出た。今では寺院の横は大きな車でも通れるほどの道で、家並みも小綺麗なアート・ショップになっている。狭い村道の両側は見渡すかぎりの水田であった。この水田の道も今は、ベモ（乗り合いバス）がすり違えるほどの広さのアスファルト道路である。途中、カティック・ランタン村を抜け、突当たりの T 字路あたりがシンガクルタ村である。T 字路を左に行くのだが、この道も昔は、荷車が通れるくらいの細い道だった。そして大きな川に出る。ここは、村人のマンディ場。巨大な岩の間を流れる水でのマンディは気持ちよさそうだ。橋を渡るとニュークニン村へ出るのだが、川に架かる橋は、人ひとり渡るのがやっとの竹の橋、別名サーカス・ブリッジと呼ばれる橋だ。この橋も来年 2 月には、アーチ型橋脚の車の通過できる立派な橋に生まれ変わる。そしてモンキー・フォレストに入り、UBUD に戻るルート。さっさと歩けば 2 時間、のんびり歩けば 4 時間のジャラン・ジャラン・コースである。

いかがでしたか、昔と今の違い。昔は村道をのんびり歩き、水田で働く人々と話したり、アヒルの行列、牛のマンディなどをのんびり眺めていられた。そんな“のんびり”が見られなくなってしまうのはちょっと残念な気がするが、それでもまだまだ UBUD には、素晴らしい散歩コースがたくさんある。あなたのお気に入りの散歩コースを探索してみしてほしい。



バリニーズ女性と結婚したい症候群

最近「バリニーズ女性と結婚したい症候群」の日本人男性がUBUDに増えている。そして、彼らは日夜涙ぐましい努力を繰り返してアタックしているようである。日本人女性がバリニーズ男性と結婚するのは、よくある話で、宗教上も女性が男性の宗教（バリ・ヒンドゥー・ダルモ）に改宗すればよいことで、さほど難しいことではないようである。が、反面、宗教心の厚いバリニーズの女性が改宗することを嫌い、ほかの宗教の人との結婚を難しくしている。と言っても、宗教心の薄い日本人男性が改宗すれば済むことなんですがね。「改宗だろうが、割礼だろうが、私はどうしてもバリニーズ女性と結婚したい」という重症の男性に「バリニーズ女性にもてるには、どうしたらよいのでしょうか？」などという野暮な質問をされた。「それは女心も十人十色、さまざまで一概に言えません」というのが正しい答えなのではあるが、それではあまりに冷たかろうと「もちろん、優しいことが絶対条件ですよ」と答えてやりました。そして「やっぱり、お金持ちであることが必修条件ですね」と一言加えておきました。これは、いづこの国も同じで、バリニーズ女性もそこはドライに割り切っているようです。当然、容姿も重要視される必要条件です。容姿はガンタン・ハンサム・カッコイイのにこしたことはないのですが、そうは言っても、親からさずかり長年付き合ってきた、決してガンタンとはいえない容姿の世の同胞諸君のために、アドバイス。

まず、長髪は不良っぽくてあまり好きではないようです。逆に剃髪や坊主頭も好きではないようです。鼻ヒゲはよいのですが、ヒゲもじゃも嫌われます。ようするに、突飛だったり、目立つことは嫌いなようです。グムッ（デブ）も裕福そうに見える程度はよいのですが、肥満は敬遠されるマイナス・ポイントです。昨年日本中を騒がせたオーム真理教の教組は、もっとも嫌われるタイプというわけですが、それにしても、女性信者にもっていたと言いますから、やっぱり日本はおかしいですね。

服装はピッピー風や短パンなどの、あまりにもリラックスしたファッションよりも、長ズボン、似合っていれば、ジーパンにTシャツ姿がベストかも。バリの人は綺麗好き、Tシャツにもアイロンをあてるほど。

バック・パッカーの定番、ヨレヨレのクサイTシャツは一発でバツです。そして朝夕は必ずマンディして、できればスッキリしたいいい香りのオーデオロンなどつけること。オダランやウパチャラの時は、バリニーズ男性を見習って、正しく、イキに正装を着こなすこと。姿勢はつねに背筋をのばし、堂々としていること。髪は衿あしに見えるくらいに刈り上げた、いわゆる、清潔感ただよう頭髪であること。総合すると、スッキリ・タイプがお好みのようです。・・・が、それも一概に言えなくなったようです・・・というのも日本でヒットしたT・Vドラマ「TOKYO ラブ・ストーリー」が、二年ほど前からインドネシアで吹き替えされて、全国ネットで放映され、それはそれは大人気でした。それに出てくる江口洋介の長髪が、バリニーズ女性に言わせると「う～ん、いいわあ」らしいのです。最近のT・V普及率の高さから、異性のルックスの好みも、そうとうT・Vの影響を受けているのではあるまいかと思われます。特に、香港、台湾の醤油顔系ハンサムも好きなようです。

そして、これは余談ですが、やっぱり親愛の情を表現する手段として、正しい、さわやかなインドネシア語で告白することとか、気のきいた贈り物（おしゃれな金の小さなピアスとか、指輪とか、流行のサルンとか）をするのも彼女の気をひくには早い手段です。

なんやかんやと勝手なアドバイスをしましたが、ようするに、愛があれば、国境も宗教もなんのその、ひとつ飛びで乗り越えられるというのが結論です。「バリニーズ女性と結婚したい症候群」の諸君の健闘を祈ります。



Illustr: Chizuru Ito

“ARMA” 全館 OPEN!!

ブンゴセカンの田んぼの真ん中にそびえ建つ、赤い屋根瓦の巨大な建物。「いったい、あれは何だろう？」と思っていた方も多いはず。そう、これがアグン・ライ・ミュージアム（Agung Rai Museum of Art）です。称して ARMA。

ブリアタンの中ほどにあるアグン・ライ・ギャラリーのオーナー、Anak Agung Rai 氏がこの ARMA の館長です。このミュージアムの設立は、アグン・ライ氏の二十年来の大きな大きな夢でした。極通スタッフも、六年ほど前から、アグン・ライ氏が、このミュージアムの夢を熱く語るのを聞いていました。「バリ島以外のほかのインドネシアの文化、そして、ゆくゆくは世界中の文化や芸術をここで紹介して、それが、バリの芸術や芸能にいい影響を与えたいと思うんだ。そして、バリの文化の育成と保存も、もちろんすすんでしていきたい。」

ARMA は現在、個人所有としてはインドネシア最大。6月9日のオープニング・イベントには、ジャカルタから文部大臣夫妻も出席し、その夜の全国放映のニュースでも取り上げられていました。

ミュージアムの広大な敷地の中には、美しい庭園を中心に、レストラン、大きなチャンデ・ブンタール（割れ門）のある野外劇場、そよ風が気持ちいいカフェ、そしてブック・ショップなどがほどよく配され、それぞれのバリ建築の美しさは、まるでバリ絵画のモチーフのようである。イベント・ホールは、ウォルター・シュピース展などの魅力的な企画が催され、野外劇場では、満月、新月にグヌン・ジャティのケチャックが観られるなど、常に斬新な興味深い企画をしています。さらに、アグン・ライ氏は、みなさんにも自由な発想で、ユニークな企画があれば、どんどん利用してほしい、と語っていました。



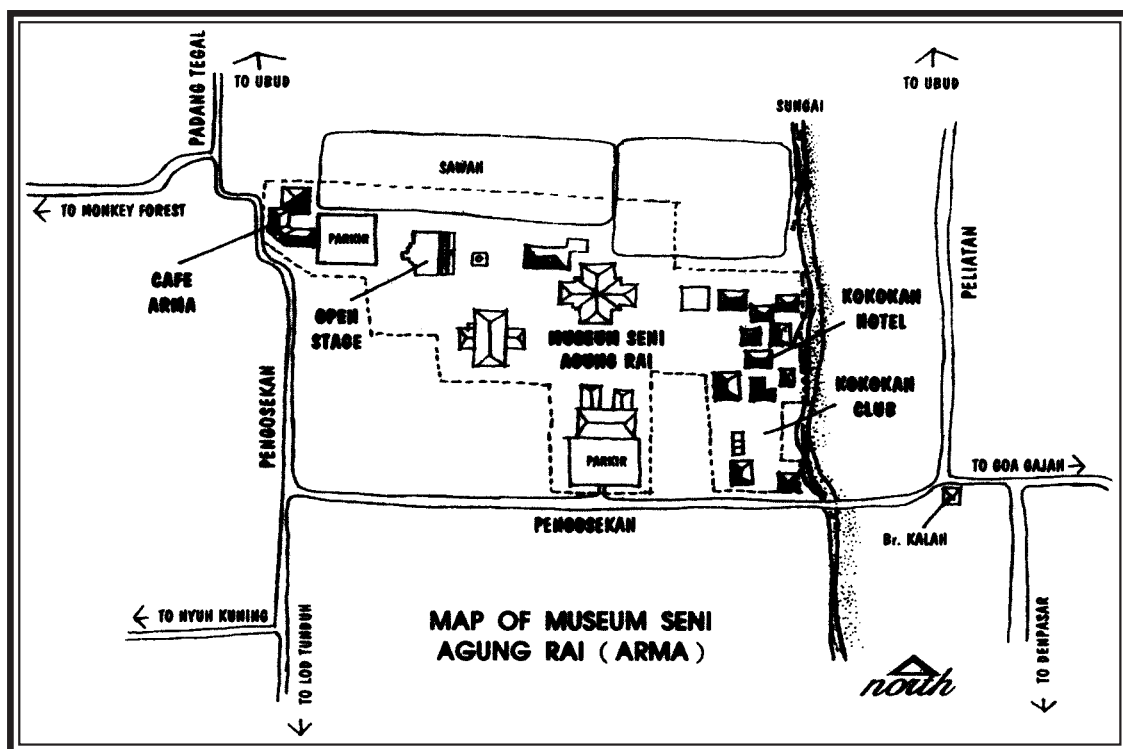
りっぱなチャンディ・ブンタールの野外ステージ



ど〜んとそびえるエントランスの門



野外ステージの入口にある、カフェ・ARMA



ARMA 全館の配置図。

それぞれの建物のあいだが余裕をもってあけられ、美しい花々や庭園が、訪れる人々をなごませる。となりの敷地には、A.A. ライ氏経営のホテル「ココカン」そしてタイ料理レストラン「ココカン・クラブ」が並ぶ。



ちょっとわかりにくいけど、ARMA の全景です

「バリ島・楽園紀行」製作こぼれ話

渡部 赫

僕の職業はとりあえず写真家である。

ここ5年くらいバリ島に通いつめ、ようやく今年の春に「バリ島・楽園紀行」という本を新潮社から出すことができた。もちろん共著者である極楽通信発行人の伊藤博史さん、バロンマンの妻となったユミさんの大変な尽力がなければ完成しなかった本である。

自分で言うのも嬉しいが、とにかくバリ島をこよなく愛する人々が、力を結集した素晴らしい本である。極通読者の皆さん!! 是非買って下さいね(立ち読みはダメヨ)。

さてと、宣伝はこのくらいにして本題に入ることにしよう。

バリ島に遊びにやってくる多くの人は、まず自分のスケジュール(仕事を休む)を考え、それから気心の知れた友人を誘い、格安チケット屋に電話して航空券の有無を聞き、1ヶ月も前からワクワクしながら眠れぬ出発の朝を迎え、なが〜い飛行時間を少々がまんしたのち、ングラライ空港に降り立つ。ここまでイッキに喋ると窒息しそうになるが、とにかくこれがビアサパターンであろう。しかし、僕は13回もバリに行って、一度もこんな経験をしたことがない。それはバカンスではなく、いつも撮影という仕事を背負ってバリに行くからである。いつもギリギリまで予定がつかず、慌ただしく出かけるのだ。今までで最悪は1週間バリで仕事をして夜のガルーダで成田に戻り、撮影済フィルムを待ち構えていた編集者に渡し、そのまま同じ飛行機でとんぼ返りしたことだ。成田のイミグレで散々疑われたことを記憶している。バリに戻ってきてから、ウブドの友人に『昨日はどこに行ってたの?』と聞かれ、答えに窮してしまった。まさか『日本に帰ってたんだ』と言ってもどうせ信じてもらえないだろう。

仕事こそが人生の生きがいとまでは思っていないが、バタバタと一年中ほとんど休みなしで動き廻っている典型的な日本人の僕も、このときばかりはさすがに懲りた。『いつか、バリで思いきりリゾートしてやる』と固く心に誓ったのだが…。あいかわらず狂奔不変の法則にどっぷりと首まで浸かっている。

今年に入ってから僕のスケジュールは地獄の様相を

呈していた。それは冒頭でも記したように、新潮社から出版する本の最終作業に追われていたことが大きな要因である。その上、写真稼業のベースである山岳雑誌の取材や原稿の締切りが大挙して一度に押し寄せていたからだ。1月末に伊藤さんとユミさんの「楽園紀行」の原稿校正のため、新潮社の担当編集者とバリに出かける日の朝まで、4本の原稿をワープロと格闘しながら書き上げ、新聞配達のパイクの音を聞きながらFAXしている始末である。もうろうとしながら車のハンドルを握り成田まで行くと、編集のT氏が山のような原稿の束を僕に手渡し、『飛行機の中でチェックをしましょう』…絶句。エコノミーのクチルなテーブルの上で、食事とスカルノハッタでの待ち時間以外は、8時間も赤エンピツの運動会である。

疲労困憊。空港に迎えに来てくれたユミさんの胸に崩れ落ちたかったが、彼女の瞳はバロンマンとの恋に溺れ(ゲップ)、桃色ハートマークである。その上、隣には当のバロンマンがニコニコと立っているではないか!! 気を取り直して、車に乗り込み一路ウブドへ。クタの熱気と喧噪を尻目にウツラウツラとするも、つかの間『ワタベさん、知ってる? ピンタンビールが飲めないの』とユミさん。『ヘッ?』。なんと突然インドネシア政府がタバコ同様、ビールにも印紙(増税?)の貼付を決めたらしく、それに難色を示したピンタンが出荷出来なくなっただけなのである。独断と偏見で敢えて言わせてもらおうと、バリハイビールは最低、サンミゲルはどうでもいい、アンカービールは普通、やはりバリでは「ピンタン」である。ここまで遥々やって来てミネラルウォーターの「アグア」ではふざけてきている。とにもかくにも僕の疲労感成層圏につき抜け、ほとんど失神状態でウブドに着いた。翌日から早速、伊藤さん・ユミさん・T氏・僕の4人で「影武者」の入口左側のテーブルを日暮れまで占領して、原稿校正作業が始まった。こういうときの編集者は当然のことながら鬼と化す。昼食以外の休憩はほとんど無し、ひたすら難解で複雑なバリの儀式を、単純明快な文章に置き換えることに専念させカンヅメ状態となる。「北部バリは暑い」というフレーズに対して『なんで暑い?』『幻想的な舞い』という説明には『どこが、ど

ういう風に幻想的なもの?』と、こまかいT氏のチェックが入る。我々の原稿には「なぜ?」「書きかえ」「あたり前」「一工夫」の赤エンピツ文字が渦を巻いているのだ。その一つ一つを丹念に解決していきながらページを進んでいく。僕と伊藤さんはある程度まで行き着くと男の習性で妥協を計るが、芯の強いユミさん一人が妥協知らずで、とことん鬼のT氏と渡り合う。活字の嵐と重箱の隅をつつくような間違い探しに翻弄されつつ、ようやくT氏の4泊6日の帰国日に一応の決着をつけることができた。

T氏を空港まで送り、入れ替わりに旅行パンフ撮影の女性モデルをお出迎え。クタのホテルに送ってからウブドの影武者へ戻ると、ピンタンビール数本入荷の朗報。スタッフのバンバンが一日中探してようやく手に入れたらしい。なんと素晴らしい奴なんだ(エライ!)。このときのビールのなんと美味しかったこと。伊藤さん、ユミさん、本当にお疲れさまでした。

さて、翌日からは仕事に追われる宿命の僕。パドマホテルのプールで、美女2人の水着姿を久し振りに手にしたカメラで爆写!!『ウーム、やはりカメラマンはこうでなくては』と一人涙にむせぶ。こうして3日間、一度も彼女たちをウブドに連れて行かせず、みっちり仕事をした。なぜ芸能の聖地ウブドを見せないの?と問われれば答えなくてはならない。それはウブドに「ニヒルで二枚目」の影武者伊藤さんがいるからだ。これが困ったことに抜群のユーモアのセンスも併せ持ち、かつ手が速いのである。女にホテル?じゃないモテル

のである。こんなウブドに美女2人を連れていけば、オランウータンの檻にバナナを投げ入れるようなものである。結論、「君子危うきに美女同伴せず」…。

こうして僕の超多忙の11日間のバリ滞在も無事終了して、帰国便のガルーダ機内での出来事。隣に座った清楚な女子大生風の観光客と話がはずんだ。『私たち今回が初めてのバリだったんですけど、もう最高でした。渡部さんは何回目ですか?』『11回かな。いつも仕事ばかりでゆっくりバカンスなんて一度もないんだ。仕事大好き人間だからネ』『エーッ!そんなの最低ですよ。いまだきの女の子が一番嫌うタイプなんだから』ガーン!! そうだ忘れていた、リゾートするという念願を……。女性に嫌われてはたまらない、次回のバリでは必ずバカンス王国のキングになってやるー!!

2ヶ月後の4月。「楽園紀行」の出版記念パーティーをウブドで催すことが今回唯一のアポである。他の2週間は遊ぶことに決めていた。遂に念願叶ってバカンス三昧の黄金の日々を過ごすこととなったのだ。しかーしである。神は普段不徳の毎日を送っている僕を許してはくれなかった。ヘビには噛まれる、原因不明の熱はでるで、僕の夢のバカンスは、ベッドに倒れている空しい時間との交換になってしまった。…合掌。

※この物語は所々フィクションとなっています。パロンマンはマデ・マハルディカのこと。バリ屈指のパロンの踊り手。スケベだがとてもイイ奴。今年春ユミさんと結婚。



Illustration: Fumio

KERANJANG (カゴ)



●竹カゴ屋さんに並ぶ、バラエティー豊かなカゴたち。

バリには、自然の素材を利用して編んだいろいろなカゴがあります。みなさんもバリの人々の家庭やみやげ屋さんでよく見かけられるでしょう？日本では竹がおもに使われていますが、バリにはカゴを編む素材の種類がとても豊富です。カゴだけではなく、今も昔も、バリの人々の生活には、そんな素材で編まれた道具が必要不可欠です。中でも私たちがよく見かけることができるカゴ類を写真に撮ってみました。それぞれの名称は、すべて、普通に使われているバリ語です。

スカワティ村は「竹細工の村」として、ガイド・ブックなどにも紹介されていて、大通りぞいには数軒のカゴ屋さんが並んでいます。ところが実は、本当の竹細工の産地として有名なのはバングリなのです。キンタマーニ山麓を含むバングリ県は、標高が高く、涼しい気候なので、いい竹が育つようです。バリの竹は、十分すぎるほどの太陽と水分のおかげで、短期間でぐんぐん伸びてしまい、そのせいか繊維のキメが粗く、太く、日本の竹カゴなどと比べると、折れやすいし長持ちしないのが難点。しかしバリの人々は、日本人に負けないくらい手先が器用なので、驚くほど細かい手作業で、素晴らしい製品を作り出します。ツーリストが好んで泊まるバリ風コテージの天井や壁に使われている、幅1・5cmくらいに裂いて編まれる“ブデ”という資材やヤシの葉でお供えものを作る時に欠かせない竹ヒゴ状の“スマッ”、そして闘鶏用のにわたりのための飼育カゴ“グアオン”など。そして、スカワティのおみやげ屋さんにも並ぶ竹細工のほとんどは、バングリでつくられたものと思われます。

さて、バリの歴史や文化に詳しい方なら、古来から伝わる古文書のことをロンタルといい、そのロンタルの材料がロンタル・ヤシの葉だということをご存じかもしれませんね。そう、そのロンタル・ヤシのことを、

バリでは“ウンタル”と呼んでいます。これは、東部バリの荒れた暑い土地でよく見かけるヤシですが、この葉をよく乾燥させたものは、とても丈夫で、かつ、しなやかに曲がるので、カゴや敷物によく使われています。

ブンゴセカン村にあるウンタル・カゴの店「Mangku Gina」は、特に目が細かく、インテリアとしてもステキなオリジナルのカゴを昔からつくっています。その昔、村に舗装道路もなかった頃、イギリスのエリザベス女王が文化視察で訪れたことが、ご自慢の店。素朴な色合と軽い手ざわりが涼しげです。注文も受けてくれるので興味のある方はどうぞ。これはちょっとめずらしい素材なのですが、川辺や沼地に生息する、つる科の植物で、“アター”というのがあります。この細い茎を乾かして、さらに台所のかまどの上で煙にいぶしたものは、バリの伝統家屋に欠かせない建築資材。アランアランと呼ばれる、草ぶき屋根を、骨組みされた竹にしっかりと巻き付けて固定させる役割を担っているのが、このアターです。だから、細くてもとても丈夫で、ちょっとやさっとじゃあ切れたりしないうえに、何十年も長持ちするのがアターの身上。このアターを利用して、ツーリスト向けにカゴを編むことを思いついたのは、テガナン村に住む、あるひとりのバリ人の男でした。はじめは口コミで、ちまちまと売られていたアター・カゴでしたが、数年前から、じょじょに人気が出て、今やあちこちで作られるようになりました。・・・が依然として、その素材の希少価値と編む手

間がかかることから、お値段はう〜んと高め。でも「100年はもちますよ」と言われると、日本円で数千円は安いかも。とにかく、しっとりした肌ざわりと、深いこげ茶色、そして、渋い光沢は魅力です。UBUDでも最近、数カ所で売られているので探してみてください。

バリには、まだまだ自然の素材がいっぱい。バナナの幹の外皮を乾燥させたものはベージュ色のゴザでお馴染みだし、ヤシの葉っぱはもうレギュラー。おもしろいのは、ほかの島からいろんな資材が取り寄せられて、和紙のような木の皮、とうもろこしの実を包んでいる皮、などのユニークなものもあります。意外にロタンは、ほとんどスマトラ島が産地で、バリにはあまり生息していないといいます。

さあ、あなたも自分の部屋に飾ってもよし、実際に使ってもよし、バリのカゴをひとつ、お土産に買ってみませんか。そして、そのカゴに思い出をいっぱい詰めこんで・・・あらあら、ロマンチックなエンディングになってしまいましたね。実際筆者が使っているのは、BESEK、これは大きさもいろいろあって、小物の収納に超ベンリ。そして今は禁煙中なので出番がないのですが、アター・カゴのタバコ・ケースは、小さいフタと本体が、絶妙な噛みあわせ具合で開け閉めできるスグレモノです。

今回は、バリの自然をそのままつかったカゴたちの特集でした。

● し ゃ し ん で か い せ つ ●



1.BESEK (ベセツ)

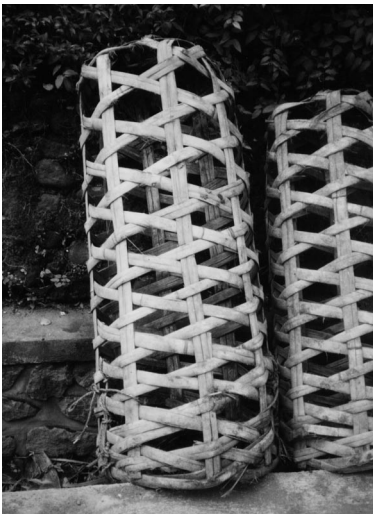
竹の表皮の部分5mmほど裂いて編まれたもので、本体とすっぽりかぶさるフタとでワンセット。小さいものだと25cm、大きいものだと50cm角くらい。おもにバンタン（お供えもの）などを入れるのに用います。模様なしのシンプルなものも多く、時には、炊いたごはんをそのまま入れて“ムレないおひつ”にもなり得る重宝なカゴです。

2.KATUNG (カトゥン)

30cm四方、高さ50cmほどの大きさ。木や竹のワクがしっかりしていて持運び用のヒモがついています。これはトベン・ダンサーなら誰でもひとつは持っている。トベンや飾り、グルンガン（かぶりもの）を入れて持ち運ぶためのカゴです。レゴンの冠にもよく使います。オダランに行くと、このカゴを持ち歩いている人がいたら、まず、ダンサー（か、アシスタント）だと思って間違いなんでしょう。

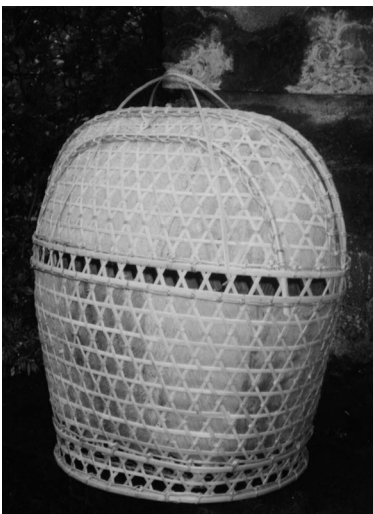
3.KOMPEK (コンペツ)

これは、ショルダー・バック。本体は竹ですが、底とフタの上部がごっつく作ってあって、なかなか丈夫。細いヒモがついていて肩にかけて持ち歩きます。プダンダやプマンクがロンタルや大切なものを入れたり、オダランでクカウイン（カウイン語=古代バリ語による唄）を唄う人が、歌詩の書いてある厚い本を入れたりします。UBUDのプリ・サレンで夜、踊りがある時、チケットや売上金をこれに入れているグループの団長さんもいます。



4.BANGSUNG (バンスン)

長さ1m、直径30～40cmほどの長細い円筒形をしています。さて、いったいこれは何のために使うのでしょうか？答えはなんと「生きたブタをこの中に押し込んで運ぶため」のものでした。このカゴに入れられた何匹ものブタが軽トラックの荷台に積まれて運ばれていたり、大きなオダランの前には、プラの隅っこで、このカゴに入れられた2～3匹のブタが身動きできずにころがっていました。



7.KISA (キシ)

これは<6>の高級版。竹で編んだベースに内側から、ビンロウジュの木の皮が貼ってあって、こんなカゴに入れられたにわとりは、さぞ強かろうと思わせてしまうエクゼクティブ闘鶏カゴです。<6>よりかなり大きめです。



5.GUWUNGAN (グウォンガン)

鳥カゴを総称してGUWUNGANといいます。GUWUNG SIAP(グウォン シアップ)でにわとりカゴ、GUWUNG KEDIS(グウォン クディス)で小鳥のカゴです。おそらくツーリストがいちばん目にする機会が多いのが、このグウォン シアップではないでしょうか。そう、この中に、パパご自慢の立派なタジェン(闘鶏)用のにわとりが飼われているのです。材料は竹、大きさは直径50cm、高さ70cmほど。デンバサルあたりのお金持ちご用達のペット・ドクター(獣医)が、病気のネコをこの中に入れて入院(?)させているのを目撃したことがあります。なるほどの使い方ですね。



6.KISA (キシ)

さて、GUWUNGANの中で飼われて大切に大切に育てられた闘鶏用にわとりは、やがて戦いに出されます。その「いざ、出陣」の時、飼い主の家から闘鶏場まで、にわたりの持ち運びにこのカゴ(カバン)が使われます。ちょうど成鶏の身体がすっぽり入る大きさで、片方の開いたところから、にわたりの立派なしっぽがフサフサと出るようになっています。このKISAはウンタルで編まれていて、偶然なのか、わざとなのか、おしゃれな格子柄になってるの可愛いですね。これを普通のバッグにして使っているイキな日本人女性もいました。あなたもいかが？

8.KISA (キシ)

これも<6><7>と用途は同じですが「カゴの善し悪しなんぞ、ニワトリの強さに関係ないわい」派のタジェン・プロご用達のKISAです。この材料は、ただ古くなったヤシの葉。編み方も大雑把で、ナイロン・ヒモでぶらさげてしまうなんて、ちょっと貧乏くさいですね。でも、こんなKISAに入れているにわとりもまた、野性的でただならぬものを感じさせる強いヤツだったりするんですよ。



● BUKU-BUKU 紹介 ●

小原孝博写真集
オラン・バリ

YUMI

なんともシンプルな“よけいなコトバ”“よけいな装飾”“よけいな色”が全くない写真集である。その名も「Orang Bali」。著者、小原氏のバリへの、そしてバリ人への並々ならぬ愛情は、写真を見れば一目瞭然だ。ページをめくるごとに、バリ人たちの美しい笑顔が目にとびこんでくる。写真そのものがむき出しで、ハートにせまってくる。バリ人って、なんでこんなにステキで魅力的なんだろう。撮る方に愛がなければ、こんな写真は撮れない。

少々プライベートなことになるが、筆者と、この写真集を出した小原孝博氏とは、知り合ってからこれ六年になる。何年も前から、彼がバリ人たちのポートレートを撮り続けているのは知っていたが、今年の始めになって、この本のベースになる数点の作品を見せてもらった時、私は涙があふれてとまらなかった。彼の撮った Orang Bali を見ていると、せつなくて、せつなくて、今、自分が Bali にいるにもかかわらず、恋しくて、かなしくて、たまらなくなってしまったのだ。ふだん目にして、毎日会って、しゃべっているバリ人たちなのに、小原氏のファインダーを通して撮られた Orang Bali たちは、あまりにも純粋で、シンプルでセクシーなのだ。

ちょうどその頃、私はおなかの赤ちゃんのことと結婚のことで悩んで苦しんだピークだった。もちろん、相手は Orang Bali。バリ人になりたくてもなれない私は、彼の作品を見て、よけいにそう感じたのかもしれない。はずかしいが、オイオイ泣いてしまった。今でもこの写真集をみると、目頭が熱くなる。それほど、Orang Bali の、バリの神々が宿った彼らの笑顔がすばらしい写真たちです。

日本にいて、ちょっと疲れたり悲しいことやつらいことがあった時、この写真集の Orang Bali たちの、光り輝くような笑顔を見て下さい。きっと心がいやされるでしょう。もしくは、私のように、せつなくて、恋しくて、泣いてしまうかも…？



オラン・バリ
写真●小原孝博
発行所●ダイヤモンド社
定価●1800 円



ぶん●中田恵 / いらすと●佐藤純子

● 10月13日

ゆうべ真夜中、そして明け方にも一度、こわくなる程の雨。そして今朝は気持ち良く晴れ上がって暑い暑い。いよいよ本格的に雨季の始まりだろうか。思った通り、蚊取線香のたきすぎで煙い部屋で寝る羽目になってしまった。アグス達と知り合えたことはとても嬉しいんだけど、この宿に2泊する気にはどうしてもなれず、今日はギャンャールを出発することとしよう。実はゆうべ9時頃、なんと私の右隣の部屋へ、又しても車でやってきた男女二人連れが入っていったのだった。そして目覚めてみれば、すでにその車はなく、隣の部屋も空。そのもうひとつ向こうの部屋には、いつの間にか男の子がひとり泊まっている様子。入り口の新しい5部屋には家族連れが泊まっていたりして、この宿は結構繁盛しているようである。そして、なんとついさっき（朝である）、バイクでやってきた男女二人連れ

が、またしても、私の隣の部屋へはいつていったのである。うーん、なかなかスリリングな宿なのであった。（そうでもないか）

9時少し前にアグスがバイクで迎えに来る。宿代を払おうとすると、何時の間にか1万の筈が1万5千になっているではないか。でも、でもアグスの実家だし、昨日あんなにお世話になっちゃったし、ここで値切るのも気が引ける。で、1万5千払って、朝御飯を食べにアグスのルマ・マカンへ。ナシ・チャンプルーとコピでしっかり朝御飯、スープまでつけてくれて美味しく頂きました。さすがに朝は、ノニもアグスもカデもブックスを沢山作ったりして忙しそうである。ゆっくりしたいのはやまやまなれど、今日はギャンャールを出発しよう、と思っていたので、朝御飯を頂いて失礼することとする。ところが、やはりお金を受け取らないのだ。アグスは「いらない」と言う。「ノニー」とノニに渡そうとすると「NG」と言うしノニの後ろではカデが「JANGAN」と言う。三人がかりで「お金はいらない」である。「なんでー、私沢山食べたよ」と言っても「NG」「NG」である。「だって受け取ってくれなかったら、私又ここへ来れないよ」と言えば「そんなことないよ。又来てよ。又闘鶏に連れていってあげるからさあ」「どうしてよ、どうして。あーあたし泣いちゃうよ」言ってるうちになんだか涙が…。そうして私は泣いてしまったのだった。確かに今までにもバリ人にはいっぱいいっぱい優しくしてもらってるけど…。

ベモに乗ってバリ島を見て回る、なんて馬鹿げた計画を実行に移した初日にこんなにいる人達に巡り合ったなんて、きっと大丈夫、この旅はついている…神様がきっと味方だあ！と訳のわからない納得をしてギャンャールのそのルマ・マカンの後にしたのでした。「きっと手紙を頂戴ね」と言って笑顔で見送ってくれたノニ。私はここで昨日の晩御飯と今日の朝御飯を頂いて、闘鶏に連れていってもらって、ホテルまで送り迎えしてもらって、それで払ったのは昨日のテ・ボトルの500だけなのだ。ありがたく好意に甘えさせてもらった私。ベモステーションへ向かう私が角を曲がって見えなくなるまで、カデは通りに出て手を振ってくれたのでした。

ギャンャールのベモステーションで客待ちしていた運転手にクルンクン行きのベモは？と聞けば“OK、OK、ここで待ってろ”と言う。待つこと3、4分、ウブド方面からやってきたベモを見つけるとおじさんたち“あれだ、あれだ、あれに乗ってけ”とベモを止めてくれる。このベモは結構大きくてちゃんと客席が列になっているやつである。車掌もちゃんといて、ギャ

ニャールで一斉に降りた中学生達から料金を徴収している。ギャニャールからは、やはりパサールで買い物を終えたイブイブが、これまたすごい荷物で一斉に乗り込む。私の荷物を見ると車掌は、“前に乗れ”と言う。わ、運転手の隣の特別席だわ、と思ったのも束の間、すぐにもう一人女の子が乗ってきて、私は運転席のまん中で荷物を抱え実に窮屈な姿勢をとらざるを得なくなったのだった。この路線はこの時間帯、結構な賑わいである。パサールで買い物を終えたイブの帰宅と、道々乗り込んでくる人も少なくなくて、その度に車掌はからだ半分ベモから出して大忙しである。クルンクンまでは30分程。実はもう過ぎたんじゃ…と、不安になりかけた頃、“クルンクンの市内なの”と運転手に聞かれる。乗る時“クルンクン？”と運転手に確かめたので聞いてくれたのであろう。教訓“行く先は乗る時きちんと確認しましょう”を、又しても実感。クルンクンは確かに何度か来た場所ではあるが、自分の知っている道がベモのルート上にあるとは限らないのである。どうやらこのベモは市内を通過してカラングッセム方面へ行くベモだったようだ。運転手は王宮前の広場へ車を回し、私一人を降ろすと、行ってしまった。そして…、私は今パダンバイにいる。

どうも、クルンクンの街が合わなかったのである。ちょっと歩いてみただけなのだが、どうにも埃っぽくて重苦しくて息苦しい。人々に生気が感じられない、ような気がする。王宮前が工事中で、当たりをつけておいたホテルへ行く道がその為通行止めになっていたこともあり、私は、このガラムの匂いたちこめる街を早々にきりあげ、パダンバイ行きのベモに乗ってしまったのだった。

パダンバイ迄のベモの運転手は“2千”と言う。別に聞いてもないのに、勝手にそう言うのである。うー、2千かあ、ちょっと高いなあ。何も言わなけりゃ、黙って乗って、降りる時千位払えばまず問題はないと思うのだが、乗る時“2千”と言われて乗れば、それで納得した、ということなのだ…で、料金交渉「おじさん、あたしさっきギャニャールからここまで1000で来たんだよ。」(ギャニャールからクルンクンまでバリ人は300～500だとアグスに聞いていた。勿論少し多めに払おうと思っているのである、荷物もあることだし…ベモの料金なんてたかが知れてるし…私はベモのようなものまで値切ろうとは、本来あまり思わないのである。でも、でも…この距離で2千はちょっと、…いくら何でも…ねえ)「おお、そーか、そーか、パダンバイまでは2千だ。」そうはっきり言われてしまうと、実際の値段を知らない弱み、大体私はクルンクンからパダンバイ迄どの位の距離かも知らないのだ。「あー、いいから乗れ、乗れ。前がいいか？後ろにするか？」「えーと、後ろにしようかな」と言うといきなり後ろの座席を掃

除なんか始める。結構可愛いおじさんである。なんか値切るのも面倒くさくなってくるし、大体2千RPは90円である。あー、こんな考えが一番いけないことはわかっています。わかっているんだけど、もう面倒くさくなっちゃって…で、乗った。それから客がぎっしりと満員になるまでじっと我慢。そしてベモはクルンクンを出発。この路線は今までの路線とちょっと違って、途中で降りていく人ばかりで、乗ってくる人が余りいない。ぎっしり客を詰め込むまでじつこくクルンクンで待っていたのはこのせい？窓の外には塩田風景。ウブドが遠くなりにつけり。ゴアラワを通り越し、最初ぎっしりだった車内にもかなりの余裕が出てきた頃、大きな籠を持って4人の子供が乗って来た。籠の中には、カットしたスイカ、ナンカのビニール袋詰め、ゆでたとうもろこし、お菓子、…。パダンバイへ売りに行くのであろう。7、8歳位だろうか。バリの子供は日本の子供より小さく見えるから…でも、それにしても10歳になるか、ならないか…、学校は行ってるんだろうか。しかもみんな裸足である。いつの間にか車内は私と、その4人の子供達だけになっていた。そしてベモはパダンバイに到着。約束通り2千払うとベモのおやじは嬉しそうに笑って、去っていったのだった。そして子供達は籠を頭に載せて、道を歩き始めた。

パダンバイは小さな街で、ベモステーションにはいるゲートを境に、ちょっとした店の並んでいる通りが、東西に別れてふたつある。東の方が幾分静か、ビーチも近く圧倒的に欧米人の姿が目立つ。西の方はバリニーズの男の子達の溜まり場？という感じである。とにかく今日は清潔なシーツの宿を求めている私は、東に宿を取ることにする。しかし、どちらにしても、4、5軒のレストランと4、5軒の宿があるだけの、本当に小さな港町だ。その中では一番人通りのある場所にたつ、割りとしっかりした宿の、ファン、水シャワー付きの部屋一泊2万RPに決める。タイルの床も、バスルームも、ここはなかなか清潔である。シーツも洗濯してあるし、まずは安心、早速シャワーを浴びる。ところが、どうもこのシャワーの水がしょっぱいのである。なかなかあなどれない。やはりここはバリなのであった。海水シャワーを浴び、近くのレストランでなんとも奇怪な“スパゲッティカルボナーラ”という名前のミートソースの卵いためスパゲッティを食べ、散歩がてら郵便局で手紙を出す。静かなビーチでは欧米人が寝ころがっていたり波うちぎわでちゃぶちゃぶしていたりするけど、それも数える程。平和を絵に描いたような街だ。ビーチ沿いの小さなカフェの、ビーチフロントの特等席に座ってエス・テを頼む。そして、そこに、その子供はやってきたのだった。

最初はジュクンの模型を「いらないか」と私に見せる。「いらない」と優しく言って追い払おうとすると、

だから、よっぽどのことがない限り、私はいろんなところで少しづつ多く払っている、と思う。ノニもアグスも、“私達なんてどんなに働いたって絶対外国なんか行けないわ”と言う。さっきベモで一緒だった子供たちの無表情な顔が一瞬よぎる。「これー」とその子はジエクンの模型を又私に見せる。「ごめんね、私、いらないの」多分私の口調は少しきつくなっていたと思う。そしてその子は去って言ったのだった。表情のない顔をして…

夜、又してもスコール。私はひとり、ビールにアラクまで飲んでしまっている。隣のワルンではバリニーズが集まってギターを弾いて歌っている。

明日はサラスワティの日だ。

ウブドを出発してギャンニャール～パダンバイ
と順調に進んできた私が、次の目的地として選
んだのがロンボク…。ギリアイルまでのチケッ
トを買って、ガイドブックも予備知識も持たず
に、私はパダンバイからフェリーに乗った。し
かし！実はこの旅、思いもかけぬヘビーなもの
となった。私が甘かった。ロンボクでの経験を
書いているとうゆに原稿用紙数十枚になってし
まうだろうからここでは割愛させて頂くことと
する。結論を言えば、折角ギリアイルまで行っ
たのに、私は翌日にはもう、とっととバリに帰
りたくなくなってしまったのである。

●つづく●



私と踊り

陽子

この原稿が、イトーのおじさんに届くのが大幅、かつ、ナーナーに遅れたのは、ほかでもなく私の踊りに対する考え方、感じ方が180度変わったからです。

まず現在のことを話す前に、以前のことを話しますね。

以前は、ただ先生（A・A・OKA）の踊るとおり、正確に、指先の一本一本まで（つまり彼女とまったく同じように）正確に踊ろうとしか考えていませんでした。先生のアドバイスだけがすべてでした。「私の先生はOKAだ。OKAのアドバイスを守り、彼女の踊るとおりに踊るだけ、それでいいんだ。」と思っていました。

でも今は、多くの人に見てもらうことの大切さ、いかに多くの人々が私のよき先生（アドバイザー）となってくれるかを、ひしひしと感じています。

ある日は、影武者でイトーのおじさんに基本姿勢を正すはがいにあいに。またある日は、ヘアーサロンのママに手の

ひらをしっかり見せるように、とご指導をうけ。そしてある時は、宿のパパに踊る時はメガネはTidak bagusだとかご指摘をうけ。またある時は隣室のオーハラのおじさんに「あんたの踊りは全然なっていない。かわいくない。」とカツをいれられ…。

以前だったら馬鹿にしていたヒマ人達のタワゴトも、今は、みんなみんな心のこもった大切なアドバイスだと思えるようになりました。そうやって多くの人々の心のこもったアドバイスによって、私の踊りが育てられていくなんて、素晴らしいと思いませんか？なんかジワ（心）の湧く湖を見たような気分です。

いつか私の踊りでみんなを“あっ”と言わせたいな。

正確さによるものではなく、心（ジワ）のおもむくままに…。



DARI JEPANG

椰子の葉影に十字星

古川テツ



子供の頃から星を見るのが好きで、中学、高校では、昼間は教科書の上によだれをたらし、眠り、先生に殴られ、夜は深夜まで天体観測という日々を過ごしておりました。その頃の私の夢は“いつか南十字星を見てみたい”というものでした。小学校の図書室の図鑑で見た南十字星は、日本からは見ることはできない、憧れの高嶺の花でした。

そして4年前の1月、彼女にそそのかされてやって来た UBUD で、初めて出会った南十字星。Pengosekan の宿で、夜明けの薄明の中、椰子の木のシルエットの傍らに光っていた南十字星。まさに“や～しっのおはっかあげにつじゅうじっせえい”（コラコラ軍歌なんか歌うんじゃない）だったのです。ホントに涙が出ました。

バリは本当に星が美しい所だと思う。UBUD のように割と街灯などの照明が多い場所でも、ちょっと路地や宿の庭に入れば、天の川が実によく見えるし、少し人家から離れた丘の上などで見る星空は Bagus! です。

ところで最近、日本の天文ファンは南半球の星を観測するのに、もっぱらオーストラリアやニュージーランドの方に出かけるようです。確かにオーストラリアの砂漠やニュージーランドの牧場で見る星空は、非常に暗い星まで見え、天体写真を撮影する人にとってはとても魅力的なようです。もっとも私のように“空に Bintang、片手に Bintang”を決め込み、のんびりと肉眼や双眼鏡で星座散歩を楽しみたいのなら、人も気候も暖かでリラックスできる UBUD が最高にオススメです。それにニュージーランドに行った友人の話だと、ニュージーランドでは南十字星が格好良く直立する時は、ほとんど頭の上に来てしまい“椰子の葉影に十字星”とはならないらしい。バリだと地平からの角度で 30 ～ 40 度位の高さになるので Bagus! なわけです。

どうか皆さんも UBUD で“空に Bintang、片手に Bintang”をお楽しみあれ。そして UBUD の星空がいつまでも美しくあって欲しいと思います。

追記：UBUD は暗いので、歩きながらの“空に Bintang、片手に Bintang”はやめましょう。私は Peliatan で道路脇の溝にはまったことがあります。



私の常宿

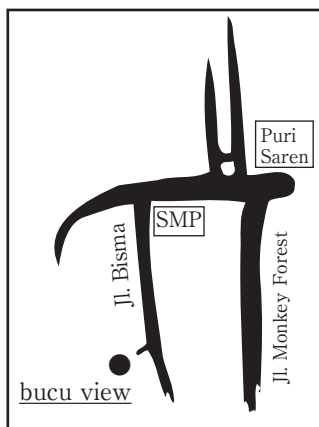
Pondok Manis

bucu view bungalows

歌姫

UBUD のマーケットから歩いて、JL.BISMA のガタガタ道の一番奥にあるブチュ・ビュー・バンガローまで約 20 分。歩くのがイヤ、暗いのがイヤ、寂しいのがイヤという人にはおすすりできませんが、とにかく、静かなところす。バンガローのテラスからの溪谷、レセプションから望むサンセットの VIEW が NICE です。敷地内にある地元の人々のマンディー場は、パイプから流れ落ちる湧き水で気持ち良い。たまにはバリニーズといしょにマンディーするのもしいかも。朝食のパナナ・ジャッフルがホールウィートのパンでとてもおいしいです。キッチンを使わせてもらって、チョコ・ジャッフルとかチーズ・ジャッフルとかを自分で作るのも楽しい。スタッフが若くて、しっかり者、そしてジェントルマンなので女の子一人で泊まっても安心。しかし、掃除は言わないとしてくれません。これは、半分セルフ・サービスだと思えばへいちゃら感覚。こんな条件が私はお気に入りです。いつも泊まっています。

JL.Bisma, UBUD,
80571, BALI
Phone:(0361)975976
Fax:62-361-975082



旅人一声 Pesan & Kesan

古川テツ

沖縄フリークの私が、いつのまにか赤道を越えて、バリにのめり込んでしまいました。沖縄の気質をあらわす「テーゲー」とバリの「キラキラ」はなんとなく似た所があります。熱い土地で暮らす人々共通の生活のリズムなのかも知れません。

バリに来ると、自分もそのリズムにはまっているのが良くわかります。今回、日本で、ウブドに長期滞在している K さんにワープロを渡すように頼まれたのですが、到着後彼女が不在だったり、雨が降っていたり、ダンスを見に行行って遅い時間になったりなどして、5 日目によりやく渡せました。日本ではちょっと考えられぬ感覚ですが、さすが長期滞在者の K さん、にっこり笑って何にもない風に許してくれました (笑)。そんなバリのリズムが素晴らしい文化や芸能を育んで来たのでしょうか、私はそんなバリのリズムを愛しているし「Tidak Apa Apa」と言ってくれるバリの人々が大好きです。

■ 幻の踊り “Nandir” ついに見る！

Vol.14の「バリの舞踏」で紹介したNandir。その時のチャーター公演では、後継者の男子がおらず、かつて踊ったことのあるお年寄り、体の調子が悪いということで、あいにく見る事ができなかった。その踊りをなんと Hotel・IBAH のグランド・オープンパーティで半分見ることができた。グループはわたし達が見た、タロ村のゴンである。女性二人のNandirが終わったあと、ひとりのおじいさんが踊りの衣裳ではなく、パケアン・アッドット（正装）でNandirを踊ってくれた。おじいさんは踊りの途中、体が硬直したように止まってしまい踊りは終わってしまった。こんな理由で半分と言うわけだ。極度の疲れからもう少して死んでしまいそうな雰囲気であった。それでも踊りは華麗な女性の振り付けで、動きは小刻みに速く、これは高齢の方にはさぞかししんどいと思われる。

ちなみに、このチャンプアンにある Hotel・IBAH は、チョコレート・ラカさん（UBUD の王族）の経営する新しいホテルで、Tjetjak Inn (Puri Campuhan) という小さなバンガローを、突然 BIG にゴージャスに変身させて OPEN したものです。超高級ホテル・アマンダリをコンパクトにしたと言っても失礼にあたるほど、丘の斜面を利用した各バンガローがそれぞれに違うデザインで、さまざまな趣きが味わえる。価格は 250 ドル。この価格でこの雰囲気は、ただ今 UBUD ナンバー・ワンかもしれません。

■ UBUD もここまでできたか！！

ジャラン・ハスマンを南下し、モンキー・フォレストとボンゴセカンへの分岐点に、簡素な造りの小さな土産物屋が並んでいたのを覚えていま

すか。赤い麦ワラ帽をかぶった愛嬌のあるお姉さんのいる店がありましたね。その店は今は取り壊され、そこにはカー・サービス・ショップが建ちました。洗車、オイル交換はもちろんラジエーターの掃除、タイヤ・バランス、そして修理までしてしまう本格的サービス・ショップです。これまでは故障すると車に詳しい友人（ベンケル君 - Bengkel とは、インドネシア語で“修理工場”のコトです）に修理を頼んだり、デンパサールの修理工場まで運んでいかなければなりませんでした。これからはこのサービス・ショップで間に合うということ。UBUD に専門店が開設できるだけの需要が見込めるほど、車の所有台数が増えたということでしょうか。いよいよ UBUD もモーター・ゼーション到来か、と思わせるようなカー・サービス・ショップです。



■ Lomba Desa !

Vol.13 “Rumah Sehat” で少しふれた Lomba Desa (村コンテスト) が 6 月に行なわれ、今年はプリアタン村が選出され、ただ今選考中です。村では選考日の数日前から、道路の整備や植樹がされ、ペンジョールが飾られた。路肩に置かれた飛び石や竹の垣根が白ペンキで塗られた。各家々も、前庭や

中庭が整理され、急きょ垣根に白ペンキが塗られた。
選考日は、ジャラン・ラヤ・プリアタンでチャガール
が出演するセレモニーが催された。

※ Lomba Desa は Desa (村) のコンテスト。こ
れは各州によって行なわれ、審査基準も違うようだ。
この他に Lomba Kota (町のコンテスト) があるよう
で UBUD は昨年、これで優勝したそうです。

■ 7月6日：OKA ちゃん結婚！！

スマラ・ラティのレゴン・ジョボグで華麗な
舞いと名演技を観せ、男性ファンを魅了する A・
A・Oka・Anggrimawati。Oka ちゃんファンの
男性にはガッカリのニュースになりますが、彼女
もついに 25 年間の独身生活に終止符を打ちまし
た。彼女が選んだ男性は、UBUD 在住の弁護士
資格を持つ学校の先生という超インテリ。将来を
見越した結婚はさすがシッカリ者と噂される Oka
ちゃんらしい。結婚式には、おおぜいの友人、ファ
ンが駆け付け、中には、日本からはるばるこの日
のために出席したカップルもありました。Oka ちゃ
んらしい明るい結婚式で、チャームングな彼女の
幸せそうな笑顔が印象的でした。おふたりの末永
い幸福を心から願うとともに、結婚して Baby を
生んでからも、ずっとずっと、あの美しいレゴン
を踊っていてほしいなあと、みなさんも思います
よね。お幸せに。



うぶっな人々 その15 ほりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末の BALI 本部です。料金は、4,000 円。お返し申し込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

し ら せ 極楽通信 本部 UBUDスタッフより

日本のみなさま いかがおすごしですか？
 Baliは いよいよ本格的な乾期のま只中。たま～に
 思い出したように雨がふることもあります。とはいえカラッと
 暑く、夜のUBUDは まるで晩夏の軽井沢。(要するに 寒い。)
 この涼しさは 9月も続くので、バリに来る予定の方は長そでの
 シャツやトレーナーをお忘れなく。

さて、極楽通信 95年度版では すでにお願い済みなのですが
 読者の方に、ご理解 いただきたいことを 申し。
 極楽通信「UBUD」の日本連絡先事務所になつてくれ
 いる ぽりりさん & えりりさんは、版下の作製・編集、そして
 煩雑な 入会金の受け取りなどを、好意で、無報酬で
 手伝ってくれている方です。よって、「極通が届かない」「意見～ご質
 「内容がつまらん」とかいう おしかり、苦情が 問い合わせなどは、
 お手数ですが、UBUDの本部まで お送り下さい。そのかわり、
 入稿、はげまし、差し入れ、なぐさめ(?) などは どんどん
 ぽりり & えりりさんに 送ってあげて下さい。どうぞよろしくお願い
 します。

アムゴンばん

Pengumuman



メガサリ版画展

バリからの神話

バリ島唯一の女性版画家であるメガサリの作品展です。

- 大阪 1996年8月1日～8月19日
JR 大阪セルヴィスギャラリー
- 東京 1996年9月1日～9月8日
スパイラル IF
- 山形 1996年8月中旬より
トヨタカローラ山形

お問い合わせ＝青い鳥創業 03-3486-7378

アムゴンばん、アムゴンばん、アムゴンばん、アムゴンばん



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバー写真：小原孝博

極楽通信「UBUD」Vol. 15

1996 年 8 月 15 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wighraha
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1996 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 ikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803